

編集後記

社会医学研究・編集委員長 星 且二（首都大学東京・教授）

学会員の皆様、遅れましたが、2012年度第二号をお届けいたします。

今回の内容は、昨年度大阪で開催された、第53回日本社会医学会の総集編7論文と、原著論文4編と報告2編からなる、二部構成です。いずれも、読み応えのある優れた力作です。これからの社会医学の発展と健康課題の解決への糸口となるべく、大いに活用されることを期待いたします。

特集論文は、第53回日本社会医学会の総集編となる7論文です。学会長を担われた、高鳥毛敏雄氏は、「現代社会における社会医学の立ち位置」をテーマとし、公衆衛生と社会医学の違いを踏まえ、西欧における社会医学が誕生した原点から論述している。社会医学は、人々の健康は社会的な影響を受けており、その健康問題を解決する実践的活動ではないかと考えられ、最近の英国の公衆衛生が、社会医学を包含したものになってきていることを報告している。

浜 六郎氏は、「薬害事例からみた安全政策の推移と課題」をテーマとして、薬害が絶えない現実に対して、過去から現在の薬害に至るまで分析している。2～3例経験すれば気づくべき害が、「薬剤は害をなす」との認識の欠如、企業の利益優先・安全(害)の軽視と、それに対する行政的規制の欠如、歪んだ論理の学問体系のもとで発生し、放置され拡大したことを実証している。現状の打開、薬害防止のためには、コクラン共同計画の声明にある情報開示の実現、科学的分析を可能とする人的、資金的、法的な裏付けが必要であることを報告している。

大島 明氏は、「わが国のNCD（非感染性疾患）対策への警告」をテーマとして、個人的に体験した、がん予防の分野での失敗を踏まえ、このような失敗を二度と繰り返してほしくないという願いを込め、世界的な動向と、実践活動を踏まえた将来への提言をしている。

横田 一氏は、「介護裁判からみるケアと医療のつながり」をテーマとして、高齢者が生活している介護施設において、ケアをめぐる民事訴訟（介護裁判）裁判ケースを通し、ケアと医療の連携のあり方を見直し、多職種協働によるスムーズな連携により訴訟件数をある程度抑えられる可能性を提言している。

辛島恵美子氏は、「安全学から見る薬害と安全の関係…“何を得て何を失うか”…」をテーマとして、「故障率曲線」を分析道具として、新医薬品の開発から市販後調査の在り方を東海道新幹線開業時期の在り方と比較分析し、広く社会の人々の共有認識にまで広めていくことが急務の基礎的条件でもあり、そのためには、翻訳や通訳の前に、標準日本語の意味と分類の整備が重要であることを提言している。

寺西秀豊氏らは、「タイのカドミウム汚染とイタイイタイ病」をテーマとして、タイ国におけるカドミウム汚染地域の実態を報告している。発達途上国のカドミウム問題解決のためには、イタイイタイ病の教訓を踏まえた適切な援助や環境問題解決にむけたネットワークづくりが求められていることを提言している。

石竹達也氏は、「政策評価に社会医学の視点をツールとしてのHIA（健康影響予測評価）の必要性」をテーマとして、健康影響予測評価（Health Impact Assessment、以下HIAと略す）とは、提案された政策、施策、事業によって生じる可能性のある健康影響や健康事象に関連する要因（健康の社会的決定要因）の変化、影響を受ける集団及び集団の属性の違いによる影響の違いを事前に予測・評価することによって、健康影響に関する便益を促進し、かつ不利益を最小にするように、提案された政策、施策、事業を適正化していく一連の過程と方法論を紹介している。公平性を重視し、健康格差も含めて社会格差を是正する手段としてHIAの活用が提案されたのである。健康の社会的決定要因への対応には保健医療政策の範囲に留まらず、保健以外の多岐に渡る政策分野での取り組みが不可欠であり、HIAの導入背景、定義、具体的手順、実践例、今後の展望について概説している。

以上、これからの社会医学の方向性を展望するために、極めて示唆に富む広範囲にわたる先進的な内容で有り、学会の質の高さを示唆している。とりまとめていただきました大阪の現地学会事務局にも感謝申し上げます。

原著論文は、英文を含め、以下4編です。

午頭 潤子氏は、「家族介護者が感じる要支援・要介護者の要介護認定等結果に対する満足度に影響を与える要因の研究」をテーマとして、家族介護者が感じる要支援・要介護者の要介護認定等結果（以下、要介護度）に対す

る満足度に影響を与える要因を検証する事を目的に、家族介護者の要介護度満足度と認定調査時の対応や要介護状態を把握するための認定調査項目等との関連について質問紙調査を260名を対象に行い、203名分を分析し、家族介護者の要介護度満足度に影響を与える項目は、現在の要介護度の重度さ、認定調査時専門職の立ち合いの必要性の認識の高さ、介護期間の長期化、身体介護を伴う起居動作介助量の多さを報告している。

西 真如氏は、「感染症治療に服薬者の社会関係が果たす役割」をテーマとして、既存の文献を検討し、社会関係の概念を服薬アドヒアランスの分析に持ち込む際の理論的及び政策上の問題について検討し、エチオピアの1地方都市で実施したHIV陽性者の服薬状況に関するアンケート調査の結果に基づいて、服薬者の社会関係が良好な服薬アドヒアランスの確立に果たす役割を分析し、服薬者が有する社会関係を考慮に入れた感染症対策を立案する際に、同時に考慮すべき治療コストの負担と社会的孤立の問題について、大阪市のいわゆるあいりん（釜ヶ崎）地区の状況に言及しながら考察している。

横山由香里氏は、「カルテがない」C型肝炎感染者の医療と生活の実態」をテーマとして、2011年9月迄に東京・大阪・鹿児島 の3地裁に提訴した232人を対象に、質問紙調査を実施した。調査票は弁護団を通じて配布・回収し、175 / 232=75.4%を分析している。患者本人調査では、肝臓がんに至るまで進行している者は26人(16.9%)、肝硬変の診断を受けている者は25人(16.2%)となっており、「カルテのない」C型肝炎患者においても深刻な病状の患者が少なくないことが推察された。身体障害者手帳の取得者は、18名(12.2%)にとどまっていた。肝硬変・肝がんの群と無症候性キャリア・慢性肝がんの群との間で手帳取得率に有意差は認められなかった。肝硬変・肝がんの群と、無症候性キャリア・慢性肝炎の群で、精神的な負担感に有意差はなく、疾患のステージにかかわらず常に「不安感」や「憂鬱」を感じている可能性が考えられた。また、患者や家族からは、経済的な負担や社会的偏見や差別による生活上の困難について報告している。

英文による原著は、以下1編です。

王 碩氏は、「日本の地域高齢者における社会関係性と健康的な生活との関連構造」をテーマとして、都市部に住む65-84歳の高齢者7,904人を6年間追跡調査し、構造方程式モデリングで分析した。主観的健康感と生存日数と関連する「健康的な生活2004」(「潜在変数を示す」)は、「社会的関連性2001」を基盤とする「健康的なライフスタイル」からの直接的な影響の他に、「身体的な機能」を経由する間接的な効果が示された。よって、高齢者の健康長寿のためには、社会関連性を基盤とした早めの予防活動により、機能低下を予防し、生存を維持させることにつながる可能性があることを報告している。

報告論文は、以下2編です。

和田千津子氏は、「新たな看護配置基準導入に伴う看護師の需給推計：5対1看護導入の実現可能性について」をテーマとして、5対1看護が導入される場合に必要となる看護師数を推計し、マンパワー確保の視点から分析することを目的としている。その結果、5対1看護の導入には、届出全病院では約24,500～60,000人、500床以上の病院のみの場合では約8,000～20,000人の看護師の追加が必要と推計された。近年の看護師の純増数は年間約30,000人と推計されており、届出全病院が5対1看護を導入することは困難であることが示唆されたものの、5対1看護の導入を大規模病院に限定するなど、その導入を政策的にコントロールすることにより看護師の需給バランスを著しく崩すことなく導入が可能となることを報告している。

三田寺裕治氏は、「介護保険施設における介護事故の発生状況に関する分析」をテーマとして、介護保険施設における介護事故の発生状況および介護事故に関連するリスク要因について検討を行っている。収集した2001事例を分析し、発生件数が最も多かったのは「転倒」であり、次いで「ずり落ち」「転落」「原因のはっきりしない利用者の受傷」の順となっていた。傷害等により医療機関に入院した事例は12件であり、転倒による事故が最も多くなっていた。介助行為や見守りを行っていない状況下での事故が多く確認され、特に「施設外へ徘徊・無断外出」「転倒」「ずり落ち」「転落」「異食行為」「利用者間のトラブル」において多く発生していた。「転倒」は要介護度が低く、日常生活の自立度が高い利用者で多く発生し、「原因のはっきりしない利用者の受傷」は全面的な介助が必要であり、意志の伝達がほとんどできない最重度の利用者において多く発生していたことを報告している。いずれの論文も、優れた研究成果で有り、今後の社会医学の発展寄与するものである。

しかしながら、いかに優れた研究でも、活字にしない限り、多くの皆様との共有により、改善策へと連動するこ

とはできません。文字をみただけで直ぐにイメージが共有できる象形文字を創造し、約 4 千年も前に世界で始めて印刷技術を発明した中国文化にも敬意を表すべきでしょう。これからも、皆様からの多方面にわたる投稿を大いに期待いたします。

最後になりましたが、ご多忙中、ご丁寧に査読いただきました先生方に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2013 年の学会は、首都大学東京で開催されます。七夕に東京でお会いしたいと思います。今回も、ご支援いただいた、本部学会事務局の宮尾 克先生らに心から感謝いたします。

査読にご協力いただいた先生方（順不同）

櫻井 尚子、中山 直子、井上 直子、黒田 研二、星 旦二